

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 学 術 )	氏名	金 好 友 子
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目 茶陶にみる露胎の位置付けと賞玩の諸相 —16・17世紀の茶書の分析から—			
論文審査担当者			
主 査	教 授	井戸川 豊	
審査委員	教 授	内田 雅三	
審査委員	教 授	一鍬田 徹	
審査委員	准教授	多田羅 多起子	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、16・17世紀の茶の湯における、茶人の露胎に対する認識および、露胎の賞玩の視点とその評価を明らかにすること、また、露胎の新たな位置付けを提示することを目指した研究である。茶入・茶壺・茶碗・天目の四器種を対象として、文献史料の調査により、茶の湯文化において醸成された、陶磁に対する特有の価値観の一端を解明しようとしたものである。</p> <p>本論文は、序章および第1章から第5章、終章で構成されている。序章では、問題の所在を明確にし、先行研究の検討を踏まえて研究課題を設定した。</p> <p>第1章では、露胎の定義と分類について整理している。露胎とは、施釉陶器のうち器体の一部に釉薬や化粧土が掛かっておらず、胎土が見える状態、およびその部分のことと定義する。露胎の分類について、①暈付から腰部にかけて広がるもの、②本来釉薬が掛けられるはずの一部が露胎となり、素地が見えているもの（釉抜け・釉切れ・火間）、③器物の見込に残る釉薬を剥がしてできた、蛇の目釉剥ぎ、④焼成温度の過不足や、焼成後の湿気により肩部分の釉薬が剥脱した肩脱茶壺、⑤目を用いて器物を焼成した時に、見込や底部に残る痕跡である目跡、以上五つを提示した。</p> <p>第2章では、『松屋会記』『天王寺屋会記』『神屋宗湛日記』の三大茶会記にみる露胎の記事、露胎を表す言葉、露胎の扱いに関する教え、の三つの観点から、茶人の露胎に対する関心や認識を検討した。茶会記にみる露胎の記事は、茶入が全体の約半数を占める一方、茶壺と天目はいずれも20%以下、茶碗は3%にも満たないことを示した。露胎を表す言葉は、最も用例が多い「土」、釉薬に着目した表現（葉ナシノ土・葉ノ懸ハツシなど）、「火間」および「石間」に大別でき、それぞれの言葉に込められた意味や意図を検討し、とくに茶入の露胎には特有の名称が付与されたことを明らかにした。露胎の扱いに関する教えについては、茶入の記事が最多で、かつ内容も詳細であった。以上を踏まえ、四器種の露胎が同等の関心を集めたわけではなく、器種によって認識の程度に差がみられ、茶人は茶入の露胎へ最も高い関心を寄せていたことを明らかにした。</p> <p>第3章では、茶入の露胎にみる、六つの賞玩の視点と評価を検討した。土色については、紫、薄赤、浅黄が高く評価され、黒、濃赤の評価は低いことを示した。土の細かさについては、粗い土よりも細かい土が高い評価を得た。底つくりのうち糸切については、糸目が細く繊細なも</p>			

のが高い評価を得た。露胎範囲については、小壺は範囲の狭いもの、肩衝・大海は範囲が広い脛高のもの、評価が高いことがわかった。なだれについては、露胎から底にかけて一筋垂れたものを好む傾向がみられた。指跡には評価基準はないが、なだれと同様に茶入の置形を決める役割を果たす重要な造形であることを明らかにした。さらに、17世紀前半には土色の定義を定め、底つくりを図示・解説する書物が登場し、露胎は茶入の理解に必要な造形として認識されるようになったことを示した。以上から、茶人は茶入の露胎に極めて高い関心を抱き、土の様々な景色を賞玩したことを明確にした。

第4章では、茶壺の露胎にみる、四つの賞玩の視点と評価を検討した。土色は、紫のような黒を呈した土色が高く評価された。土の細かさについては、細粗の違いによる記事数の差異や厳格な評価基準はなく、多様な土肌の様子を賞玩したことがわかった。露胎範囲については、脛高の茶壺（清香限定）と肩脱茶壺が高い評価を得た。瘤については、瘤の数が多く、優れた景色が認められるものを高く評価したことを明らかにした。

第5章では、茶碗と天目の露胎について論じた。茶碗の露胎については、近世初期に美濃窯で製造された茶碗にみる露胎範囲や形状が、次第に多様化する傾向を指摘した。しかし、露胎に関する記事は極端に少なく、内容も簡略で、茶人の茶碗の露胎に対する関心が低いことを示した。天目の露胎に関する記事は土色が大半を占め、高い評価を得た土色は、黒と紫であることを明らかにした。露胎範囲については、二重掛けされた釉薬のうち外側の釉薬が脛高であることを示す記事のみで、露胎範囲の評価は詳らかではないことを示した。

終章では、以上を総括し、露胎の賞玩の諸相と新たな位置付けを提示した。茶入は①拝見記の多さ、②露胎を表す言葉の豊富さ、③露胎への名称の付与、④露胎の扱い方の詳説、⑤賞玩の視点が最多という、他器種にはない五つの傾向が見られた。そのため、茶入は茶人が最も高い関心を寄せた器種であることがわかった。この背景には、製造過程における茶入特有の見所の出現と、道具の格付けが常に上位にあり続けたという、二つの要因を提示した。そして、室町後期から江戸前期において、露胎は器種により茶人の関心の程度が異なる賞玩の視点であり、なおかつ、17世紀前半からは道具の理解の指標となる重要な造形と位置付けた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 16・17世紀の茶の湯において、茶入・茶壺・茶碗・天目の四器種にみる露胎のうち、茶人は茶入の露胎へ最も高い関心を寄せていたことを明確にしたこと。これにより、茶人の露胎に対する認識は、器種によって大きな相違があることを示した。
2. 16・17世紀の茶の湯において、茶人が重視した露胎の賞玩の視点とその評価を明らかにした。その結果、茶入の露胎は最も賞玩の視点多く、高い評価を得た露胎の様子やその評価基準は、器種ごとに異なることが明らかとなり、なおかつ、この時代における道具評価の要諦を探る端緒を開くことができた。
3. 使い手である茶人の立場から、露胎の新たな位置付けを提示したこと。これにより、茶陶にみる露胎の意味や意義が明確になった。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

令和 3年 8月 2日